

Title	カモシレナイの「可能性明示」：「意味」「文脈」「機能」の記述
Author(s)	川口, さち子
Citation	聖学院大学論叢, 15(2): 57-65
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=179
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

カモシレナイの「可能性明示」

「意味」「文脈」「機能」の記述

川 口 さち子

A Description of Meaning, Context and Function

How Does *Kamoshirenai* Generate Its Communicative Functions out of the
“Manifestation of Possibility?”

Sachiko KAWAGUCHI

Recent studies of the forms of modality in Japanese, such as *kamoshirenai*, have focused on the relationship between basic meanings and those that are derived. Utilizing *kamoshirenai* as an example, this author asserts that the communicative function of a word in the specific context in which it is spoken should be more carefully examined in either semantic or pragmatic studies. Caution should be exercised so that the meaning is neither confused with nor misinterpreted as a derivative of its basic meaning. This contextual interpretation process is most recently described as the “manifestation of possibility.” In a critique of Hirata’s study on the pragmatics of *kamoshirenai*, she maintains that her analysis of the process of generating the communicative functions of *kamoshirenai* reveals that notions such as “indirectness” or “euphemism” are irrelevant to the discussion of the topic.

はじめに

本論は、日本語のモダリティ形式であるカモシレナイを取り上げ、その意味と用法を論じるものである。従来、意味論の記述は、一つの言語形式について複数の意味や用法を列挙し、それらの関連を取り上げるものであった。例えば、カモシレナイについては「蓋然性の低さ」を挙げる一方で、「あるいはそうかもしれない。しかし、…」と前置きして反論に続ける用法があることから、その「間接性」や「婉曲さ」が指摘されることもある。しかし、特定の言語形式が実際に使用されたと

Key words; Kamoshirenai, Meaning, Context, Communicative Function, “Manifestation of Possibility”

カモシレナイの「可能性明示」

きに生ずる「意味」は、実はそのことばのもともとの意味ではなく、そのことばが使われている「文脈」の要請により生じた、その場その場での個別の役割、すなわち「機能」であると、筆者は考える。そこで、本論では、最近のモダリティ研究文献からモダリティと語用論の接点について論じているものに注目し、その主張を批判的に検討しながら、筆者の考える「意味」と「文脈」と「機能」の関連、およびその三つの概念を使った言語表現の記述について考察する。

1. 先行研究

これまで、「カモシレナイ」は、モダリティ表現として、「ダロウ」「ヨウダ」「ソウダ」「ラシイ」「ニチガイナイ」などととも論じられてきた。

寺村（1984）、野田（1984）、森山（1989）仁田（1991）などでは、カモシレナイの意味をこれらの表現と比較して、「相対的に蓋然性が低いということを表す」というようにとらえている。

しかし、三宅（1995）では、カモシレナイによって表される意味を「命題が真である可能性がある」と仮定し、これを「可能性判断」と呼んだ。さらにこの可能性判断は「単に、可能性があるということ認識しているにすぎず、可能性が高いか低いかという可能性の程度（確からしさ）についての認識ではない」としている。さらに、仁田（2000）では、蓋然性判断として、カモシレナイとニチガイナイを挙げ、カモシレナイを「可能性把握」すなわち、「命題内容として描きとられる事態が、生起する可能性をもったものであることを示す」、森山（2002a）では、「その命題が真であるかどうかの可能性を問題とする範囲で、当該可能性の存在に焦点を当てる形式」というように位置付け、森山（2002b、）でも、「その可能性が低いながらもあるということに着目する表現である」としている。

一方、カモシレナイの表現性を文脈上の機能の面から取り上げた研究もある。平田（2001）がそれで、Brown & Levinson（1978,1987）のポライトネス（politeness）理論の「フェイス（face）」という概念に注目し、そこからカモシレナイ使用の語用論的側面に光を当てて、分析を試みている。

平田は、「カモシレナイ」の意味を「押し量り」と派生した意味としての「婉曲」に分け、さらに、「婉曲」を「間接的表現」、「前置き」、「擬似的同意」に分けた上で、カモシレナイは、対話場面において、話し手が聞き手の積極的または消極的フェイスを威嚇せず、それらを維持するためのポライトネスとしての役割を果たしていると述べている。

2. 「意味」「文脈」「機能」

カモシレナイの先行研究を概観すると、その意味の記述が「相対的に蓋然性が低い」から「命題が真である可能性がある」「その可能性が低いながらもあるということに着目する」と「蓋然性の

低さ」ではなく「可能性の存在」に注目する方向に変わっていき、今その語用論的な機能として「婉曲」が働くメカニズムまでが論じられるようになってきたということが分かる。本論の筆者は、これらの先行研究を踏まえながら、カモシレナイの基本的意味を「ある程度の可能性があるということ」を明示することであるととらえ、その文脈的機能を考察したいと考える。

およそコミュニケーションに現れる表現のいかなるものも、その表現を発信する者と、それを受信して解釈する者が存在し、かつ表現を発信する者にはその表現を行うための目的が存在する。「文脈」と呼ばれているものの実質を捉えるには、この三つの要素の存在、つまり「誰が」「誰に向かって」「何のために」を記述する必要がある。例えば、だれかに筆記用具を借りるということは、「筆記用具を借りたい者が、適当な筆記用具を持っている者に、その筆記用具を借りる」という文脈でコミュニケーションが行われるということなのである。そのときの具体的な表現は、相手が友達であれば「ごめん、ちょっとそのペン貸して」に、役所の窓口の係りであれば「すみませんが、ちょっと何か書くもの、貸してもらえませんか」に、それぞれなるであろう。この場合、「ごめん」や「すみません」は「相手に負わせた物理的・心理的負担があるべきでないものだという認識を示す」という基本的な「意味」を共有し、それが上述のような文脈で「依頼という、相手に負担をかける働きかけに入るためのよびかけ」として「機能」するのである。ことばの「基本的な意味」と「文脈的な機能」の関係はこのようなものであるというのが本論の筆者の考えである⁽¹⁾。

上述のような表現の機能を分析するためには、「ごめん」「すみません」などの意味記述を「謝罪を表す」とするよりは、「相手に負わせた物理的・心理的負担があるべきでないものだという認識を示す」のように抽象化しておいたほうがよい⁽²⁾。「謝罪」というのも特定の文脈における機能の一つ⁽³⁾なのである。同様に、上記依頼表現の「ちょっと」「貸して」「もらえませんか」なども、それぞれの持つ意味が同じ文脈で「依頼」という機能を果たすのに都合がよいために選ばれてきたのである。

このことを本論のテーマであるカモシレナイについて言うと、カモシレナイの基本的意味が、「誰が」「誰に向かって」「何のために」を異にする個別の文脈において、さまざまなコミュニケーション上の機能として現われるということになる。本章冒頭でも述べたように、現在のカモシレナイの意味記述は、「可能性の存在」に注目する方向に向かっている。その可能性の確かさの度合いであるが、森山（2002b）では「その可能性が低いながらもある」としているのに対し、三宅（1995）では「可能性が高いか低いかという可能性の程度（確からしさ）についての認識ではない」と、確かさの度合いについて言及する必要がないと主張している。本論の筆者も、この三宅の考えに賛同したい。というのは、仁田（2000）の「2.9 蓋然性判断」のカモシレナイの項（同文献p.130）に言うとおり、「事態に生起の可能性があるということは、また、同時に起こらない可能性も残されている」ということだからである。つまり、「可能性がある」といえば、その事態が生起する確率は高く50%だ⁽⁴⁾ということである。そこで、本稿ではカモシレナイの基本的な意味は、「ある程度の可能性があ

るということを明示すること」であるとして、可能性の高低については言及しないこととする。

3. 平田論文への疑問

前章では、筆者の考える「意味」「文脈」「機能」について述べ、カモシレナイについてはその基本的な意味は「ある程度の可能性があるということを明示すること」であると捉えた。では、「ある程度の可能性があるということを明示すること」というのは、コミュニケーションの上でどのように機能するのであろうか。言い換えれば、「可能性の存在」をわざわざ明言することによって、われわれは何を表そうとしているのだろうか。

この議論に移る前に、平田（2001）を再び見てみよう。というのは、平田のこの論文は、カモシレナイの使われ方を特定の文脈内で捉えており、平田自身が日本語教師であることもあって、筆者の研究と同じ方向を志向しているようにみえるからである。しかしながら、その分析にはレベルの異なるものを同次元で論じているところがうかがえ、このままではあまり生産的な議論ができない恐れがある。そこで、平田（2001）の批判的な検討を行いつつ、そこで論じられている問題を、本論の筆者はどう分析するかを述べていきたい。

平田（2001）はカモシレナイの意味を「押し量り」と「そこから派生して「婉曲」」の二つに分けている。「押し量り」の部分は、おもに仁田（1991）を基礎にすえているようで、さらに益岡（1991）によって、「蓋然性の程度の低さ」をその「基本的な意味」としている。この部分は、本論が「蓋然性の低さ」に言及しないことを除けば、それほど大きな相違はない。しかし、平田は「押し量り」に続けて、「文脈により、意味が派生・拡大して」（同文献p.61 L.3）「婉曲」の意味をもたせることができる」（p.61 L. - 1）としている。一方、この「婉曲」については、＜間接的表現＞＜前置き＞＜擬似的同意＞の3種があるとして、具体的な用例を検討した後で、次のように述べている。

以上、「カモシレナイ」が対話において、どのような意味を持ちえるのかを整理してみた。「カモシレナイ」は、命題に対する確信の低さから「押し量り」としての基本的意味を持つが、そこに話し手の主観を排除し、命題に客観性を持たせる作用を働かせる機能があると考えられる。（同文献pp.62-63 下線は本論の筆者）

これを見ると、平田にあっては、[カモシレナイの基本的意味は「押し量り」だが、それは「命題に客観性を持たせる」という機能を有し、また文脈によってその基本的意味が派生・拡大して、＜間接的表現＞＜前置き＞＜擬似的同意＞という3種に分けられる「婉曲」の意味をもたせることもできる]という主張が行われていることになる。つまり、「命題に客観性を持たせる」のは「押し量り」の機能であり、「婉曲」は基本的意味「押し量り」が派生・拡大した意味だということに

カモシレナイの「可能性明示」

なる。しかし、この結論には矛盾がある。

まず、「婉曲」が「意味」だというのは不都合である。「婉曲」というのは「遠まわしに／非明示的に／間接的に表すこと」であり、このことがことばの「意味」になるとは思えない。「推し量り」や「ある程度の可能性があるということを明示すること」などというのは、真偽判断のあり方についての記述だが、「婉曲」は真偽判断の記述にはならない。一方、「命題に客観性を持たせる」というのは、文脈が要請したカモシレナイの機能である。この機能が、平田自身の言うように、「命題が真である確かさの程度の低さを表す話し手の心的態度に、話し手の主観を取り除く作用が加わり、命題を客観化できる」(p.63 L2)というような過程で生ずるであろうことも容易に理解できる。このような「命題の客観化」の用例が<間接的表現><前置き><擬似的同意>の3種の「婉曲」に分けられているのであるから、まさに「婉曲」=「命題の客観化」=「機能」である。すなわち、平田(2001)は、「意味」と「機能」に混同が認められ、ある部分で説明がトートロジーになってしまっているのである。

また、平田(2001)では、Brown & Levinson(1978,1987)の「ポライトネス(politeness)理論」を利用して、カモシレナイが対話場面で聞き手の「積極的フェイス(positive face)」や「消極的フェイス(negative face)」を威嚇せず、それらを維持するためのポライトネスの役割を担っている⁽⁵⁾と述べ、カモシレナイの「語用論的分析」を行っている。しかし、この「相手のフェイスを維持する」というのも、やはり文脈が要請するカモシレナイの機能の一つなのであり、それがたまたま「ポライトネス」の枠組みでも説明が可能だというだけのことなのである。平田論文では、「ポライトネス」に関わる部分は、前述した3種の「婉曲」とは別個に独立しているような印象を受けるが、ポライトネスと婉曲は同一の現象を違う名前と呼んだものである場合もきわめて多い。事実、「婉曲」の用例として挙げられている<擬似的同意>の(8Ⅹ9)の用例(p.62)は「ポライトネス戦略」の例でもあるし、「ポライトネス」の議論で取り上げられた[12]の用例(p.65)は<擬似的同意>とも<間接的表現>とも解釈できる。つまり、平田(2001)は、特定の事象を分析するのに二つのツールを不必要に混用しており、その意味でも効率の悪い議論をしていることになるのである。

4. 「可能性明示」の機能

前章では、平田(2001)を取り上げ、それが、語句の基本的意味が文脈の要請によってどのような機能を持つかという、表現の構造を志向した研究になるはずであったのに、操作概念の不整理や分析ツールの混用などで生産性の落ちる議論になっていたことを検討した。本章では、前章で課題として掲げた、カモシレナイのコミュニケーション上の意味合い、すなわち「ある程度の可能性があるということを明示すること」が生み出す、さまざまな機能について考察する。

まず、カモシレナイの基本的意味が文脈の要請で特定の機能を生み出す過程を、前章で取り上げ

カモシレナイの「可能性明示」

た平田論文の用例⁽⁶⁾から確認してみよう。はじめに、<擬似的同意>の〔 8 Ⅸ 9 〕の用例(同文献p.62)

〔 8 〕 正夫「おまえ、そんなみみっちいこと言ってねえで…」

杏子「みみっちいかもしれないけど、それが私の人生だし、それが私のしあわせなんだ…」

(ピュ)

〔 9 〕 信江「でも四十五のお父さんにとっては、十分対象になり得るでしょう？」

孝平「そうかもしれないが、そういうことは今回関係ない。..(略)」 (向日葵)

用例〔 8 Ⅸ 9 〕ともに登場人物の一人の発言に対し、相手が反論している場面である。このような文脈、すなわち「談話の参加者の一人が」「その直接の相手に向かって」「その相手の発言に対して反論する」という文脈では、反論する人物は相手にとってその反論が受け入れられやすいようにすることを要請される。その際、相手の発言を直接否定する言い方、つまり〔 8 〕なら「みみっちくはない」、〔 9 〕なら「そんなことはない」というような言い方をすると、攻撃的な議論になり、相手の反発をかう恐れがある。そこで、相手の発言内容にカモシレナイをつけて引用することによって、その内容が真であることに「ある程度の可能性があるということを示すこと」になり、相手に発言内容を否定したという印象を持たせずに議論をすることができる。

このような機能を平田は、<擬似的同意>と名づけたのだが、その命名には疑問を感じる。というのは、もし用例〔 8 Ⅸ 9 〕の登場人物が相手の発言を完全に正しいと受け入れる言い方、つまり〔 8 〕なら「そう、みみっちいよ」、〔 9 〕なら「確かに十分対象になり得る」というような言い方をしたとしても、相手に反論したいと思っている場合には、結局「そう、みみっちいよ。でもね、それが私の…」、「確かに十分対象になり得る。しかし、そういうことは…」という論の展開にならざるを得ず、カモシレナイの有無に関係なく反論の出だしの部分は<擬似的同意>と名づけざるを得ないからである。つまり、相手に反論しようという場合に、相手の発言内容を肯定的に捉えることを明示する言い方は、カモシレナイがあるうがなかろうが、<擬似的同意>なのである。したがって、<擬似的同意>という機能をカモシレナイの「派生的な意味」というように捉えるべきではない。

では、なぜ用例〔 8 Ⅸ 9 〕の登場人物は「そう、みみっちいよ」、「確かに十分対象になり得る」と言わなかったかということ、もしそのように相手の発言を全面的に肯定してから反論すると、相手にとっては自分の発言が肯定された直後に否定されることになり、「不意打ちを食わされた」感じを与えてしまうからである。そこで、相手の発言内容を完全に真であると断定せず、「真である可能性がある(したがって、そうでない可能性もある)」と捉えていることをカモシレナイで明示することによって、相手の発言内容を否定したり無視したりする態度をとらないことを表明しつつ、続く部分が反論であることを予想させることが可能になるのである。もちろん、相手の発言を全面的に肯定した上で「しかし」と反論することも、若干フェアな議論のしかたではないという批判を気

カモシレナイの「可能性明示」

にしなければ不可能ではなく、カモシレナイを使うかどうかは、表現者の自由裁量に任されているのである。

以上のことをまとめると、用例(8 Ⅸ 9)のようなカモシレナイの用法は、次のように記述される。

「談話の参加者の一人が」「その直接の相手に向かって」「その相手の発言に対して反論する」(より正確には、「相手の発言内容を否定したり無視したりする態度をとる攻撃的な方法も、全面的に認めておいて結局は反駁するという〈不意打ちを食わせる〉ような方法もとらずに反論する」という文脈において

反論の表現者が、「相手の発言内容が真である可能性がある」ということを明示する(すなわち、そういう認識であるという態度を表明する)ことによって

続く部分が反論であることを予想させ、展開の見えやすい議論を行う

この記述の の部分は、「文脈」、 は「基本的意味」の個別状況への当てはめ、そして はこの特定文脈におけるカモシレナイの「機能」である。 の「文脈」には、この談話にかかわる人間の間関係も反映される。つまり、このようにカモシレナイを使う表現者は、相手に言いたいことは伝えながら、なおかつ相手とはなるべく穏健な関係を維持したいと考えているか、そのように期待される社会的立場にあるか、どちらかだということである。 では、カモシレナイの「基本的な意味」である「ある程度の可能性があるということを明示すること」がこの特定文脈に当てはめられるとき、「可能性」の部分は何の可能性であるかについて確定するところである。すぐに理解されるように、「〈ある程度の可能性〉というのはこの場合、〈相手の発言内容が真であること〉についての可能性である」という程度の意味解釈は、決して「意味の派生・拡大」と呼ぶような事象ではない。 の「機能」の部分は、「展開の見えやすい議論をする」というきわめて合理的なコミュニケーション機能を示す記述になっており、この「機能」が「婉曲」というような命名から予想されるレトリカルな用法でもあいまい化表現でもないことが分かるようになっている。

5. まとめと課題

本論では、第1章で最近のモダリティ研究におけるカモシレナイの扱いを概観し、カモシレナイが「蓋然性の低さ」を表すのではなく「可能性の明示」を表す、というように、その「基本的な意味」の記述が変化してきていることを見た。また、モダリティ研究と語用論の接点を扱った、平田(2001)のような新しい方向性を持つ研究の紹介も行った。第2章では、ことばの意味や用法を分析する際に「文脈」と「機能」を同時に考えるという筆者の姿勢を明らかにし、カモシレナイの「基本的意味」を「ある程度の可能性があるということを明示すること」と捉えた場合に、その「文脈

カモシレナイの「可能性明示」

的機能」がいかに現れるかを示すことに筆者の関心があることを述べた。第3章では、平田(2001)の内容を批判的に検討することによって、その関心のあり方を具体的に示し、続く第4章で筆者の考える「文脈」と「意味」と「機能」の記述が、ことばの意味や用法の表現レベルでの分析に有効なツールとなることを述べた。

今後、この「意味・文脈・機能」の記述の有効性は、より多くのカモシレナイの用例によって検証されなければならない。実は、筆者は本論の執筆に当たって、相当数のカモシレナイの用例を採取し、ある程度筆者の提唱する記述方法の妥当性を検証しているのだが、紙幅の関係で本論ではその議論ができない。別稿に譲ることにしたい。

また、筆者の専門とする日本語教育の分野で、このカモシレナイのようなモダリティ形式が日本語学習者に対してどのように説明され、習得を目指した練習として提出されているかにも非常に興味がある。この課題も教材分析の手法で取り組んでみるつもりである。

注

- (1) 「文脈」や「機能」についてのこのような関係の捉え方は、川口(1996)・川口(2000)などの研究に負うところが大きい。
- (2) 「意味」と「機能」についてのこのような関係の捉え方は、山梨(1995)などの認知言語学の研究成果に負うところが大きい。
- (3) もちろん「ごめん」と「すみません」では「謝罪」のあり方が異なる。前者は「相手への負担はあるべきでないが、さほど深刻なものでもない」という認識を、後者はそれが「ある程度深刻なもの」として捉えていることを、それぞれ表す。それが、例えば、前者が「友達から友達に向かって」の、後者が「成人から特に個人的関係のない別の成人に向かって」の謝罪に、それぞれ適応されるゆえんである。
- (4) 実際は、問題の事態が生起する可能性が相当高くても、それがあくまでも可能性であるかぎりその事態が起こらない可能性もあることになる。したがって、可能性が50%以上であってもカモシレナイを使用することは不思議でも不自然でもない。宮崎(2002)P.145にも同様の議論が見える。
- (5) 「ポライトネス理論」および「積極的フェイス」「消極的フェイス」についての説明は、Brown & Levinson(1978,1987) pp.61-70あるいは平田(2001) pp.63-65参照。
- (6) 用例の出典は、各用例の最後()内に略語でしめされている。本論に引用したものは、以下のとおり。(ピュ):『ビューティフルライフ』北川悦吏子(2000)角川書店/(向日葵):『丘の上の向日葵』山田太一(1995)NHK出版

参考文献

- 川口義一(1996)「日本語指導の文脈化」『日本語教育・異文化間コミュニケーション』, pp.69-99, 北海道国際交流センター
- 川口義一(2000)「「ナラ表現」の「文脈化」と「教材化」」『紀要』13, pp.69-99, 早稲田大学日本語研究教育センター
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄(2000)『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店, p.130
- 野田尚史(1984)「～にちがいない/～かもしれない/～はずだ」『日本語学』3 - 10, 明治書院, pp.113-

- 平田真美(2001)「カモシレナイの意味 モダリティと語用論の接点を探る」『日本語教育』, 108号, pp.60-68
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 三宅知広(1995)「カモシレナイとダロウ」『日本語類義表現の文法(上)』, pp.197-200, くろしお出版
- 宮崎和人(2002)「認識のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』, p.145, くろしお出版
- 森山卓郎(1989)「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』, pp.57-94, くろしお出版
- 森山卓郎(2002a)「可能性とその周辺」『日本語学』21巻55号, p.17, 明治書院
- 森山卓郎(2002b)『表現を味わうための日本語文法』, pp.183-187, 岩波書店
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房
- Brown, P. & Levinson, S. (1978, 1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge: Cambridge University Press